

---

# 虫の王者になりました。

水無月 皐月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虫の王者になりました。

### 【Nコード】

N9151W

### 【作者名】

水無月 皐月

### 【あらすじ】

星野奈々美は、トラックにひかれて死んでしまった。目が覚めると目の前には老婆がいて、青虫にされた奈々美。虫の王者になれば元の姿に戻れると言われて虫の王者になったけど元の姿に戻れない奈々美は元の姿に戻ろうと奮闘するが……。虫の王者になったけど元の姿に戻れない奈々美のお話。

## 0、青虫になりました

ああ、死ぬんだな。

どんどん迫るトラックを見ながら、そんな事を思う。

来世は、猫になりたい。

自由気ままな猫になりたい。

あつ、でも、犬もいいかも。

まあ、どっちでもいいや。

そう思ったと同時に、激痛が走った。

「                    つー!!」

トラックにはねられ、ごろごろと転がる。

トラックの運転手め、よくも私を引いてくれたな。

残った力で、うつすらと目を開ける。

トラックは止まったが、数秒後、物凄い勢いで走り去った。

この、クソ野郎！ ひき逃げかよ！

あつ、もう無理。

さようなら、私……。

さようなら。

「おい！ いい加減、起きろ！」

うるっせーなー。

「もう少し寝かせろ……」

おやすみ。

「寝るな！」

「うるさいんだよ！ いいじゃないか！」

ガバリと起き上がり、私を起こそうとするうるさい奴を見る。

私を起こそうとしたのは、黒いローブを着て木の杖を持った老婆だった。

「誰だよ……」

「やっと起きたか。わしは、魔女じゃ」

何言ってるの？ 頭、大丈夫？

はっ、まさか、認知症！？

「認知症ではない！ 魔女じゃ」

偉そうに胸を張って腰に手を当てる老婆。

……あれ？

私って、死んだんじゃないかったっけ？

「それは、わしの力じゃ！」

更に胸を張る婆。

「てか、ここどこ？」

「ここは、アーネルス。異世界じゃ」

異世界……？　ここが？

「お主にはここで、虫の王者になってもらう」

む、し？

「そう、虫じゃ」

婆はそう言うと、木の杖を振った。

木の杖の先が光ったと思えば、婆が突然でかくなった。

「虫の王者になれば、お主の姿を元に戻してやろう」

元の姿？

えっ、じゃあ、今は？

「ほれ、見てみい」

婆は大きな鏡を私の前に置いた。

その鏡を見ると、そこには、青虫が映っていた。  
え、青虫？

「お主の今の姿は青虫じゃ」

おお、結構かわいいじゃん。  
青虫もいいかも。

「……とにかく、虫の王者になれ。いいな」

あつ、ちょ、待ってよ！

婆は木の杖を一振りし、どこかに消えた。  
虫の王者って何？

でも、まあ、青虫かわいいし、いいか。

## 1、アゲハ蝶に拾われました

これからどうしよう。

地面に生えていた葉っぱを食べながら、これからの事を考える。

虫の王者つて、虫の王でしょ？

はっ、無理、ムリ、むり。

そんなめんどくさいこと出来ない。

礼儀作法は出来るけど……… かつたるい。

それでも私は、お嬢様なのだ。

幸せではなかったけど………。

うまつ、葉っぱうまつま。

「まあ、こんな所でどうしたの？ 迷子？」

葉っぱうまつま。

「はっ、まさか、捨てられたの？ なんてかわいそうなの！ こんな幼い子を捨てるだなんて、最低よ！ 産むならちゃんと、自分で育てなさいよ！」

葉っぱう……… え？

自分で育てる？

虫つて、卵産んだら終わりじゃないの？

異世界だから？

異世界だからなのね！？

「ダーーーーーリーーーーン」

道理でここらで、青虫を見かけなかったのね。

て言うか、どちら様？

残念だけど葉っぱを食べるのをやめ、声がした方を見る。  
そこに居たのは、綺麗なアゲハ蝶さん。

綺麗だなー。

「何だー！ーい！？ マイ、ハニーー！！」

うっざー！

何こいつら！

「この子、捨てられてたの。私たちで、立派に育てましょう？」

「なんてかわいそうなんだ。そうだね、そうしよう。ハニー、君は優しいね」

「まあ、ダーリン。優しいだなんて……」

頬（？）に手（？）を当てる、アゲハさん。

「ふふ、可愛いなー、ハニーは」

「そんなことないわ。それより、この子に名前をつけましょう」

「そうだね、ハニー」

名前をつけるのは大歓迎だけど、こいつウザい。

「カラリエーヴァなんてどうだい？」

おっ、中々いい名前じゃないか。

うざいけど、いい奴だな、お前。

「いいわね、ダーリン。初めまして、カラリエーヴァ。私は、ハニ  
ー」

えっ、ハニーって、名前だったの？

「僕は、ダーリン。よろしくね、カラリエーヴァ」

こいつも……。

まともな名前貰えて、よかった。

「カラリエーヴァじゃ長いから、エヴァって呼びましょう？」

「そうだね、マイハニー」

「さっ、家に帰りましょう」

ハニーさんはそう言つと、私を持ちながら飛んだ。

おお、すごい。

ハニーさん力持ち。

それに比べて、ダーリンは……。

いやっ、そうでもなかった。

ダーリンは、木のツルで編まれている大きめな籠に、大量の葉っぱを乗せながらハニーさんの横を飛んでいた。

ごめんよダーリン。

お前の事、馬鹿にして。

「エヴァ、もう少しで着くからね」

そう言ったハニーさんを改めて見る。  
そして驚いた。

さっき見たときは、ただのアゲハ蝶だと思ったが、近くで見ると、  
人の体に羽が生えていたのだ。

人のように、ちゃんと服を着ている。

大きさを蝶だけど。

もしかして、私もこうなるの？

それなら、人に戻らなくていいかも。

「エヴァ、着いたわよ」

ハニーさんはそう言うと、木に開いた穴の中にひらりと入った。  
家の中の家具は、ほとんどが木で出来ていて、ソファやカーテン  
などは、布などで出来ている。

なぜ、ここに布が？

虫だろう、お前ら。

しかも木の中に家って、どうやって彫ったんだよ。

「ここが私たちの家よ、エヴァ」

「ようこそ、エヴァ」

不思議がいっぱいだけれど、私がこの生活になれるのは案外早い  
かもしれない。

## 2、サナギになりました

時が流れるのは早いもので、私が青虫になってから一年もたった。その間は特に何も起こらず、平和だった。

え？ サナギにはならないのかって？

まだなってますよ。ええ。

異世界ですからね。

いつサナギになるかなんて知りませんよ。

ハニーさんやダーリンも教えてくれませんし。

別に、生活するのに困らないからいいんだけど。

「エヴァ、ごはんの時間よ」

ハニーさんがそう言いながら葉っぱが盛られた籠を私の前に置いた。

「うにー」

やった、飯だぜ。

青虫の姿じゃ何もできないから、ごはんの時間が一番の楽しみ。それ以外の時間はたいてい寝ている。

あ、あと、なんか、うにーって言えるようになった。

初めてうにーって言った時、ハニーさんとダーリンは大喜びしていたな。

『ダーリン！ エヴァが喋ったわ！』 『本当か！？ 早いじゃないか！ 普通なら一年はかかるのに、二か月で喋るなんて、さすがエヴァ！！』

とか何とか。

えっ、普通なら一年もかかるの！？ さすが異世界……。

なんて思ってしまった。

「おいしい？　今日はね、ダーリンが朝早くとってきてくれた葉よ」

ハニーさんがニコニコと微笑みながら言った。

ダーリン……。見直したよ。

こんなにおいしい葉っぱをとってくるなんて。

うま！　めっちゃうまい。

「うに、うにー！」

うまいです。美味しいです。

私がそう言くと、ハニーさんは顔を輝かせて笑みを深めた。

「ダーリン！　エヴァが美味しいって！」

ハニーさんは椅子に座り、本を呼んでいるダーリンに声をかけた。

「ん？　何だって？」

本に夢中だったダーリンは、ハニーさんにもう一度聞き返した。

「エヴァが、美味しいって！」

ハニーさんは、満面の笑みでダーリンにそう言った。

「そうか！　それは良かった！　それを探すのに苦労したんだぞ」

ダーリンも嬉しそうに笑みを浮かべる。

「うにー」

ありがとうございます。  
わざわざこんなおいしい葉をとってきていただいて。  
とっても美味しい葉だよ。

「どんどん食べて大きくなるんだぞ」

ダーリンは嬉しそうにそう言う。

何！？ 私を太らせようとしているのか！？

そ、そりゃ最近、やけに大きくなってきてるけど……。  
気にしてるんだぞ！

私も乙女だ！ 絶対痩せてやる！

「最近大きくなってきてるし、そろそろじゃない？ ダーリン」

「そうだね。そろそろかな？」

「早いわね、エヴァは。もうこんなに大きくなって……」

「あつと言っ間だったね」

ん？ どうしたんだ？

そろそろって何が？ ねえ、何が？

「うにー？」

「あらエヴァ、気にしなくていいのよ」

「そっだよエヴァ。そのうち分かるから」

ハニーさんとダーリンは、悲しそうに微笑みながら言った。  
え？ 何かあるの？

教えてくれたっていいじゃないか！  
教えてくれよ。

「うにー」

「大丈夫よエヴァ。心配しないで」

「皆、そうなるんだから」

皆？ ってことは……何？  
全くわからん。

「さあ、お腹一杯でしょ。そろそろ寝なさい」

ハニーさんはそう言つと、私を優しくなでてくれた。  
うっ、眠い。  
わかりました。寝ます。  
おやすみなさい。

おはようございます。

って、あれ？

ここどこ？

何でこんなに暗いの？

まさか、誘拐！？

でも、私なんか攫う人、居ないよね。

いたとしたら変人だ。

ハニーさんー、ダーリン！

何処にもいないの？

いつもなら、私が呼んだらまっすぐに来てくれるのに……。

たといえ、寝ていようが、外に居ようが。

おかしい。

やけに暖かいし、ぬくぬくしてる。

よし、昨日の事を思い出そう。

えっと、ごはん食べて、そのごはんがめちゃうまくて、私  
が大きくなった事をハニーさんとダーリンが悲しそうにしてて、そ  
ろそろって何が？ ってきいたら誤魔化されて、そんでもって、寝  
かしつけられて……。

ん？ そろそろって、これの事じゃない？

でも、何だろう……？

暖かい、真っ暗、あと、狭い。

んー、私は青虫でしょ？ ってことは……。

ま、まさか、私、サナギになったの？

マジか！？ しばらく待てば、羽化するんじゃない！？

やった！

やっとな、やっとなサナギに……。

ああ、嬉しい。

クソ嬉しい。

それなら、いくらでも待てるな。

よし、とりあえず、寝よう。

おやすみ。

暇だ。

することない。

寝ることしかできない。

何もないし、狭いから動けないし。

嬉しいけど、嬉しいけど……暇だ！！

今何時なのかわからんし、サナギになってから何日目なのかも分からん。

ああ、早くこの地獄から出たいな。

### 3、羽化しました（前書き）

更新遅れてすみませんorz

### 3、羽化しました

この野郎！

早く破れる！

繭に向かつて悪態をつくが、何の意味もない。最近繭に攻撃もしているが、全然破れない。サナギになってから私的に五ヶ月たった。

それなのに！

何故、羽化できない！！

私、何か悪いことしたっけ……？

うーん、心当たりはないけど。

しょうがない、こうなったら強行突破だ。

繭に体当たり（？）をする。

おっ？

なんか少し明るくなったぞ？

もう少しだな。

五回ほど体当たりをすると、繭は簡単に破れた。

息をい良く繭を突き破ったため、ごろごろと転がる。

うう、眩しい。

暗い繭の中にずっといた私の目にはきつかった。

「エ、ヴァ？」

うう、その声は、ハニーさん？

閉じていた目をうつすらと開けて後ろを見る。そこには以前と変わらないハニーさんがいた。

「エヴァ！ やっと羽化したのね！」

ハニーさんは自分のことのように喜んで私に抱きついてきた。うっ、苦しいです。

「ダーリンに報告しなくちゃ！」

ハニーさんは急に立ち上がり、家から出て行くとした。

「あっ！ その前に、エヴァに服を着せなきゃ」

突然止まったハニーさんは、私の手をつかむと寝室に向かった。寝室に行くとハニーさんはクロゼットから白いワンピースを出した。

「エヴァの髪は黒だから、白がいいわね」

ん？ くろ、ですと？

自分の髪を一房持ち上げて見ると、黒だった。

おお、黒だ！

「さ、これを着てココに座って私が帰ってくるまで待ってるのよ」

椅子を持ってきたハニーさんは急いで外に出て行った。

私はもらったワンピースを着ると、大人しく椅子に座った。

いやー、人間の体は便利ですな。

何といっても、手と足があるのがいい。

人間って素晴らしい！

けど、下着をはいていないから、物凄くスースーする。

それより、サナギになってからどれくらい経ったんだろう？

案外、一ヶ月くらいだったらしい。

「エヴァ！ ダーリンを連れてきたわよ！」

勢いよくドアを開けたハニーさんの後ろには、ダーリンがいた。  
これまた以前と変わらない姿だ。

「おお、エヴァ、やっと羽化したのか。一年も経ったときは、羽化しないんじゃないかと思ったけど、ちゃんと羽化できて良かった」

は？ 一年ですと？

「い、一年？」

「一年と半年だったよな？」

と、ダーリンがハニーさんに聞いた。

「ええ、そうよ」

「そ、そんなに……」

五ヶ月くらいだと思ってたのに……。  
まさか、そんなに経っているとは。

「それがどうかしたの？ エヴァ？」

ハニーさんが心配そうに私の顔を覗き込む。

「え？ あ、ううん。ちょっと驚いただけ」

ハニーさんを安心させるため、にっこりとほほ笑む。

「そう？　ならいいんだけど」

ハニーさんはホッと息を吐いた。

「さ、そんなことより、お祝いをしよう」

ダーリンが提案してきた。

「そうね、それがいいわ！」

ハニーさんがうれしそうに笑う。

「早速準備しなくちゃ」

嬉しそうなハニーさんを見ると、自然と笑みがこぼれてきた。

「さ、エヴァ、行きましょ」

嬉しそうなハニーさんに手を引っ張られる。

「うん」

今日、私カラルリエーヴァは無事羽化しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9151w/>

---

虫の王者になりました。

2011年12月1日18時54分発行